奥三河の花祭観光関連製品の開発について

１．はじめに

本県奥三河地域は近年交通インフラの整備が進み、観光関連市場の拡大が見込まれます。当センターでは当地で伝承されている国の重要無形民俗文化財「花祭」関連の需要に向けて、瀬戸産地の特性を活かした磁器製品を提案し、花祭開催地域の記念品等を商品化しました。

２．花祭関連市場の現状とニーズ

奥三河天竜川水系に伝承される神事芸能「花祭」は本県を代表する民俗芸能の一つです。この祭は毎年 11 月から 3 月上旬にかけて北設楽郡 15 地区で開催されており、東栄町 11 地区の花祭来場者は例年延べ 7600 人、各地区 400 人から 900 人に上ります。

集落を単位として伝承されている「花祭」は，振草系、大入系といった系統の違いだけではなく、伝承地毎に祭の次第や様式等に特徴や個性が生じ、それが地域のアイデンティティを構成しています。

運営は各地区の氏子が構成する「保存会」が担っており、多くの保存会が祭の来場者の献銭に対する返礼として記念品等を提供しています。かつては地域独自の記念品を製作する地域が多数ありましたが、過疎化と氏子の高齢化から、現在は簡易化、類型化が進んでいます。しかし、現地調査により地元にはオリジナルの記念品製作の要望があることが判明しました。

そこで、各開催地域の祭の特徴、製品開発のニーズ、条件等を具体的に調査し、地域の祭にふさわしい製品を企画・提案し、瀬戸焼の新規参入を図りました。

３．製品開発

花祭開催地、東栄町古戸、御園、布川の 3 地区に対して花祭関連の記念品のデザイン提案を行い、産地企業により花祭をモチーフとした湯呑を商品化しました。（**図１～図３**）

花祭は「榊鬼（さかきおに）」の「鉞（まさかり）を持った赤い鬼」というう厳めしいイメージが定着していますが、今回は天井や結界等に配される華やかな切り紙の祭具「切り草」、多彩な舞姿、美しい舞衣装や舞道具等の、花祭に特徴的な鬼以外のモチーフを活用し、花祭の豊穣で華やかなイメージを表現しました。また地域毎に絵柄のモチーフや表現手法を変え、イメージが重ならないよう配慮しました。

図１　古戸地区　記念品

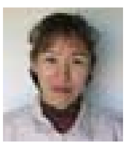
図２　御園地区　花祭返礼品

図３　布川地区　花祭返礼品

製品のコスト競争力を高めるために、既存の素地を使用し、現生産ラインで製造できるよう産地企業の製造設備、加飾技術、焼成条件等を踏まえて製品デザインを行いました。

４．おわりに

当センターでは引き続き花祭観光関連製品の開発を支援しています。お気軽にお問い合わせください。



瀬戸窯業技術センター　製品開発室　長谷川恵子（0561-21-2116）
研究テーマ：　陶磁器と地域資源のコラボレーションによる製品開発
担当分野　：　陶磁器デザイン